

芥川龍之介「煙草と悪魔」論

——悪魔のメフィストフェレス性と牛商人の「心虚」——

高山 さよ子

序

芥川龍之介「煙草と悪魔」は、「新思潮」（一九一六年一月）に「煙草」の題で掲載され、のちに改題を経て短編集『煙草と悪魔』に収録された。作品全体が五つに分けられた五部構成であり、初出の本文末尾の記述から発表年の十月二十一日に執筆が完了したと考えられる。芥川の作家人生を通して制作された、キリスト教をモチーフとした作品群「切支丹物」の第一作目である。

同時代評や初期の先行研究^①において、本作品は軽い動機によって書かれた、深い意味を持たない作品として扱われた。本作品の主題が善悪の一体であるという読みは多くの論者により肯定され、主題研究の着地点が一定になりやすい傾向にあった。本作品が「切支丹物」の第一作目であることから、作者のキリスト教観を追究する視点からも研究がなされたが、本作品がもつキリスト教の要素は異国文化への憧憬や遊び心のあらわれと捉えられるこ

とが多く、作者の宗教意識の分析材料として不十分とされた。これらの理由から、芥川の初期作品の中でも重要な作品として扱われづらい傾向にあったが、従来の研究は作家論に傾きやすく、作品論的検証が不十分であるという問題点があった。

本稿では「切支丹物」あるいは作者の宗教的思想のあらわれた作品としての本作品の価値は追求せず、作品論的精読を試みる。本作品第二部から第四部における時空間設定と人物像の特色に着目し、作品内で色濃く見られるゲーテ「ファウスト」の要素の働きについて考察する。

第一章 「自分」による伝説の性質

本作品第一部において、語り手「自分」は煙草の日本伝来の歴史的事実^②に言及したのち、日本に煙草を持ち込んだのは伴天連と共に来日した悪魔であるという「伝説としての答」を提示する。煙草を持ち込んだのが悪魔であることと、悪魔を連れてきたのが

伴天連であることは、どちらも伝聞体であり、典拠の存在を暗示して客観的根拠を演出する効果を持つ。しかしここで重要なのは、伴天連を「(恐らくは、フランシス上人が)」とする部分は根拠が示されず、「自分」による推測となっていることである。「自分」の推測でしかないはずのフランシス上人は、第二部から第四部の「伝説」の主要人物として登場する。「伝説」は、「自分」により根拠のない潤色が施された「自分」による伝説」とでも呼ぶべきものである。

「自分」による伝説の時空間には、主にフランシス上人と煙草の周辺に、史実との不一致が存在する。注目すべきは次の二点である。

〈一〉フランシス上人の来日が春であること

〈二〉煙草の伝来期が天文年間であること

〈一〉について、浅井庸八郎『聖フランセスコザベリヨ書翰記下巻』(三省堂、一八九一年一月)⁵⁾では、ザビエルの鹿児島上陸は一五四九年(天文十八年)八月十五日とされる。〈自分〉による伝説⁶⁾では、「天文十八年」は史実通りだが、来日の季節は春となっている。芥川はザビエルの関連書籍を熟読していたため、本作品の設定は作者の意図の範疇である可能性が高い⁶⁾。

〈二〉については、鈴木達也『喫煙伝来史の研究』⁷⁾を参照する。

ここでは、明治・大正期には大槻玄沢「蕙録」の影響で、煙草の日本伝来期を元龜・天正頃とする説が有力であったとされている。また、同書では代表的な文献にみられる煙草伝来説が列挙さ

れるが、その中に天文年間説はない。以上から、本作品執筆時は、煙草が天文年間に伝来したという情報に触れづらかったと考えられるのである。

〈一〉の設定は、悪魔の煙草栽培に現実性を付与するための季節の変更と考えられる。「蕙録」には寺島良安「和漢三才図会」からの引用があるが、その内容は本作品の悪魔の煙草栽培と酷似している。以下に、「和漢三才図会」中「蕙録」への引用箇所を掲げる⁸⁾。

煙草は二月に種を下し五月に移し栽え、新芽を摘り去り虫を除く。毎旦怠るべからず。高さ三四尺、葉は商陸に以て長く大きく、七八月に葉を採りて藁筵を覆ひて之を盪し、(中略)八九月に茎の頭に朶榿を出して小白花を開く。赤色を帯びて略紫苑の花に似たり。

一方〈二〉の設定は、煙草および悪魔を天主教と同時に来日させるための、年号のすり替えであると考えられる。執筆当時の通説であった元龜・天正ではなく天文を用いたのは、それが史実上のザビエル来日時期だからであろう。〈自分〉による伝説⁶⁾は伝承の形式をとるが、その内部では、天主教と共に来日した悪魔が煙草を育てるという筋書きを優先して、史実と虚構を混同させた人工的な時空間が展開されているのである。

第二章 複合的な悪魔像の比重

―悪魔のメフィストフェレス性―

次に、「自分」による伝説」という人工的な時空間における主人公である、悪魔について分析する。悪魔像を形作る特徴的な要素の一つが、本作品内で見られる他の文学作品七作についての言及である。

- ① 喜多村筠庭「嬉遊笑覧」
 - ② アナトール・フランス「司祭の木犀草」
 - ③ ゲーテ「ファウスト」
 - ④ マルコ・ポーロ「東方見聞録」
 - ⑤ トルストイ「イワンのばか」
 - ⑥ 「新約聖書」
 - ⑦ 小泉八雲「日本雑記」中の「果心居士」
- このうち②③⑤⑦の四作が悪魔の素性に関わるものとして、作品本文中以下の箇所で言及がある。

②アナトール・フランス「司祭の木犀草」
尤も、アナトール・フランスの書いた物によると、悪魔は木犀草の花で、或坊さんを誘惑しようとした事があるさうである。

③ゲーテ「ファウスト」
勿論、ドクトル・ファウストを尋ねる時には、赤い外套を着た立派な騎士に化ける位な先生の事だから、こんな芸当などは、何でもない。

⑤トルストイ「イワンの馬鹿」

掌に肉豆がないので、イワンの妹に叱られた程、労働の嫌な悪魔が、こんなに精を出して、鋏を使ふ氣になつたのは

⑦小泉八雲「日本雑記」中の「果心居士」

松永弾正を翻弄した例の果心居士と云ふ男は、この悪魔だと云ふ説もある

この四箇所において、②と⑦には伝聞体、③と⑤にはさりげない断定が用いられる。「司祭の木犀草」で悪魔という言葉は全文中二箇所において比喩的に用いられるのみであり、「果心居士」においては先行研究^⑩のとおり、果心居士が悪魔と同一の存在であると判断できる部分はない。一方「ファウスト」「イワンのばか」では、悪魔は一登場人物として存在し活動を行う。「ファウスト」において赤い外套の騎士に化けるのはメフィストフェレスという個性を持った悪魔である。一方「イワンのばか」でイワンの妹に叱られるのは、三匹の小悪魔を束ねる老悪魔であり、固有名はない。両者には、言葉を用いて人間を翻弄しようとする姿が共通

する。¹²⁾

「煙草と悪魔」の悪魔は、この二作の悪魔のうちメフィストフェレスとの共通点を特に多く有する。「イワンのばか」の老悪魔との共通点は、多弁な面と労働嫌いな気質の二点のみである。一方メフィストフェレスとは、多弁な面のほかに、言葉を使用する立場の人間に変身し相手を欺く点、「賭」という言葉を強調する点、会話と独白で敬語と常語を使い分ける点、会話と独白で一人称を「私」「己」と変える点、人をばかにした慥々たる調子で話す点、一杯食わせた相手におじぎを行う点、「ペンタグラマ」の威力を受ける点の七つが拳がり、全部で八つの共通点を持つ。

芥川は数々の作品で「ファウスト」への執心を見せている。¹⁶⁾「妖婆」(一九一九年九月)、「動物園」(一九二〇年一〇月)、「雑筆」(一九二〇年一月)、「LOS CAPRICHOS」(一九二二年一月)、「保吉の手帳から」(一九二三年五月)、「文芸雑感」(一九二三年七月)、「僻見」(一九二四年四月)、「河童」(一九二七年三月)、「三つのなげ」(一九二七年四月)、「文芸的な、余りに文芸的な」(一九二七年五月)、「闇中間答」(一九二七年九月)などがある。この十一作のうち、「LOS CAPRICHOS」「保吉の手帳から」「文芸雑感」「三つのなげ」「闇中間答」の五作がメフィストフェレスと関連するものである。

芥川の作品、未定稿、草稿、手帳類には随所に悪魔が散見するが、芥川は時に「Daemon」「Daimon」「Satan」「イワンの馬鹿の小悪魔」「るしへる」「メフィストフェレス」といった多様な名を

用いて悪魔の個性を表現する。元々悪魔一般を意味する「Daemon」「Daimon」と、一般性と個性の両面を有する「Satan」を除いた残りの三者は、個性と個性の両面を有する。そしてその三者の中でも、芥川作品には特にメフィストフェレスの名が頻出する。メフィストフェレスとされる存在が活動する作品は、「切支丹物」の作品以外にも「芸術その他」(一九一九年一月)、「保吉の手帳から」(一九二四年一月)、「三つのなげ」(一九二四年一月)、「闇中間答」の五作がある。ここへ未定稿「メフィストフェレス(仮)」(推定執筆年は一九一六年頃)を加えると、六作となる。これらの作品からわかるのは、芥川の作品内で活動するメフィストフェレスは、常に何かを語り、時には教える、言葉を利用する存在として描かれていることである。²³⁾芥川作品のメフィストフェレスの特徴を、本作品の悪魔も多分に汲んでいると言える。

第三章 牛商人と「賭」——誘惑の機能不全——

本作品中で悪魔のメフィストフェレス性が特に際立つのが、賭の場面である。前節で掲げた八つの共通点のうち、ペンタグラマに関する点以外の七つが見られるためである。この場面では、悪魔が取り付けた賭と第五部の「誘惑」とが異なるものであることに注意したい。

尤もアナトオル・フランスの書いた物によると、悪魔は木犀草の花で、或坊さんを誘惑しようとした事があるさうである。

これなら、ちよいと磔を爪でこすつて、金にすれば、それでも可成、誘惑が出来さうである。

まだフランス・ザヴィエルが、日本へ来たばかりで、伝道も盛にならなければ、切支丹の信者も出来ないので、肝腎の誘惑する相手が、一人もゐないと云ふ事である。

これでは、折角、海を渡つて、日本人を誘惑に来た甲斐がない。

誘惑に勝つたと思ふ時にも、人間は存外、負けてゐる事がありはしないだらうか。

本作品内で用いられる五箇所「誘惑」のうち、四つ目までが賭の前、五つ目が賭の後にあらわれるものだが、牛商人と悪魔の賭を直接示すものは一つもない。牛商人の窮地を描いた場面では「悪魔の手にのつた」と言及されるのみである。

賭の場面で悪魔の言葉を終始冗談と捉え続ける牛商人は、相手の提示する報酬を自分が獲得する将来の実現に全く期待を抱いて

おらず、報酬に対する欲望を感じていない。賭が成立した原因は、誘惑されていることに無自覚な牛商人が、気づかぬうちに悪魔の口車に乗せられたというだけのことである。したがって、悪魔は誘惑に失敗しながら賭を成立させたのであり、賭に至る経緯を「一人の人間の信仰と悪魔の誘惑との闘い」として解釈することはできない。ここでの誘惑を、第五部の「誘惑に勝つたと思ふ時」にそのまま当てはめることはできないのである。

本作品の確実な典拠である高木敏雄『比較神話学』（博文館、一九〇四年一〇月）との比較から、悪魔の誘惑の機能不全は作者の意図の範疇であつた可能性が高い。「比較神話学」において、悪魔と人間の契約の説話の定型として例示されているのは、背教を自覚したうえで悪魔の誘惑に負ける人間像である。しかし本作品では、典拠で成立していた誘惑の構図が、牛商人の無自覚によつて破綻している。牛商人は、伊留満であると信じ切つた相手との軽口の前に背教を予見するはずがなく、誘惑に心を揺らす様子も見せないのである。

賭の相手が悪魔であると気づいた後、牛商人は肉体と魂の危機にさらされていることを自覚し「うっかり、悪魔の手にのつた」ことを後悔する。この後悔を、天主教信者が罪を自覚した後に抱く「悔い改め」の気持ちとする先行研究もあるが、牛商人の姿には天主教の基本的な教理における不完全な痛悔があらわれていると考えるべきであり、牛商人に模範的な天主教信者の姿が投影されていると捉えるべきではない。作者は「切支丹物」の制作にあ

たりキリシタン書を入念に調査していたため、本作品執筆時も天主教における痛悔の区別をふまえていた可能性がある。以下に『完全なる痛悔』（ラゲ編、三才社、一九〇二年九月）を引用する。

完全なる痛悔の心は罪ある故地獄に落べきを悲むにもあらず、又罪ある故天国の快樂を失ふを悲しむにも非ず、其外身の損失を顧みて悲むにもあらず、第一歎き悲むべきは即ち心を盡し力を盡して愛し奉るべき広大無辺の天主に限りもなく嫌ひ給ふ罪を以て背き奉りし事はなり

この教理に沿えば、牛商人が起こす「後悔」は天主教の教理上、完全な痛悔とは明らかに異なる。身体と魂が「亡ぶることなき猛火」に焼かれる運命となり、洗礼を受けた甲斐がなくなることにへの恐れが、後悔の要因となっているためである。しかし牛商人は、そのような不完全な痛悔を持つ信者でありながら、キリストの名で立てた誓いを守ろうとしたり、聖母マリアの加護を願ったりと、信仰心がなければ起り得ない言動を度々見せる。〈自分〉による伝説において、牛商人は真面目な信者でありながら、自身の信仰に不完全な部分があると自覚し得ない、無自覚な人物として描かれているのである。

第四章 牛商人の「心虚」

―傍観者から当事者への転身―

賭と後悔の場面に見られる牛商人の無自覚は、作者が誘惑の描写を失敗した結果生まれたものとは考えにくい。ここでの悪魔と牛商人の構図は、ゲーテ「ファウスト」及び森鷗外「ファウスト考」(富山房、一九二三年一月)に関係すると考えられるためである。²⁷⁾明治時代、「ファウスト」は西洋思想の教養書として「婦女老幼」に読書が促された。²⁸⁾「ファウスト」の「第一部書齋」では、ファウスト博士に化けたメフィストフェレスと、それを本物の博士と信じ込んだ学生とのやりとりが描かれる。学生はメフィストフェレスの皮肉な言葉の真意に気づかず、偉大な博士の言葉として鵜呑みにする。本作品中の、伊留満に化けた悪魔と牛商人の関係と同じ構図である。この場面を「ファウスト考」では以下のように解説している。

メフィストフェレスの賽ファウストと対話をする学生は小ファウストで、ギョオテは学生を書くにも自己をモデルにした。ストラアスブルヒ時代を回顧して、「際限なき心虚、ファウスト中の学生の典型」と略記してゐる。心虚とはほんやりしてゐること、注意してゐないことである。

この「心虚」こそ、「比較神話学」の説話の定型を改変して牛商人に付与された、誘惑への無自覚ではないだろうか。

「ファウスト」第二幕第二幕では、第一部から数年を経た同じ場所、同じ人物により、同じ構図が繰り返される。「得業士」となった学生は皮肉な達観を獲得した自分に陶醉し、自身の愚かさを認めた博士（悪魔）を「自知の明がある」と笑うが、自分が現に悪魔に騙されていることには気づかず、第一部で見られた「心虚」は存続している。得業士が去った舞台上に取り残されたメフィストフェレスは、得業士の愚かさを嘲りながら、客席で拍手もせず静かに観劇する若者に向かって、次のように語りかける。

あなた方は大ぶ冷澹に聞いてあますね。

好い子のあなた方の事だから、構ひません。

まあ、考へて御覧（マツ）ない。悪魔は年寄だ。

年が寄つたら、わたしの言ふことが分かるでせう。

観客は、舞台と客席の間の次元の差を飛び越えて語りかけてきたメフィストフェレスによって、傍観者ではいられなくなる。「自知の明」のない得業士を他人事として眺めていた観客は、悪魔の言動によって自身の「心虚」を自覚し、自分たちも当事者であることを知る。この「心虚」の自覚が、本作品の第五部に託されているのではないだろうか。

煙草は海外から薬として伝わり、明治・大正期には薬効と有害

性の両方が信じられていた。²⁸⁾ 薬として日本に定着した煙草の化けの皮が剥がれつつあった当時、たとえ煙草有害説に十分な科学的根拠が伴わなかった時代であっても、人々はそれまで自分たちがいかに呑気に煙草を嗜んでいたかを自覚させられたことであろう。第五部では、煙草の有害性に気づき得なかった頃の人々の盲目状態が、「ファウスト」の「心虚」になぞらえられているのではないだろうか。

結

第五部では明治以後の悪魔の再渡来が断言され、煙草伝来当時と同様の暗躍が示唆されながらも、悪魔の活動の詳細は語られない。だからこそ当時の読者は悪魔の活動に想いを馳せ、かつての煙草に代替する有害な何かが明治以後に持ち込まれたことに気づき得ない「心虚」を、現在の自分たちが持つことを知る。それは、煙草が日本へ渡来した時代の人々が持っていた過去の「心虚」とリンクし、過去の人々の「心虚」が元で煙草という毒物が定着しきった明治以後に読者にとつての現在を再認識させる。煙草の受容の歴史の変遷を読者に意識させることにより、再渡来した悪魔の新しい道具が明治以後の人々の「心虚」に隠れて伝播し、日本に定着しきつてから正体を表す未来を、読者に示唆するのである。

「明治以後」である本作品発表当時に生きる読者に「心虚」を

自覚させるうえで、「自分」による伝説」内で作られた登場人物像は不可欠であった。牛商人に添加された「心虚」と、それを強調するメフィストフェレス的な悪魔像があつてこそ、第五部末尾の顛末が、当事者としての強い自覚を読者に与える機能を持つのである。

注

- (1) 廣津和郎「十一月文壇」創作及び其他」(『時事新報』一九一六年一月)では、本作品には技巧的な趣味性以外に期待すべき特色が見当たらないとされた。加藤武雄「芥川龍之介氏を論ず」(『新潮』一九一七年一月)では、本作品は小説よりもお話に近く「思ひ附を楽しんで、その材料の本質的ならぬ興味に連れらるゝ、軽い心持で書かれた作品」であるとされた。
- (2) 越智治雄・菊地弘・平岡敏夫報告、三好行雄司会(『シンポジウム』芥川龍之介の志向したもの——初期の作品をめぐって——)(『国文学』解釈と教材の研究)學燈社、一九七五年二月)において、三好氏によって本作品は「一種の知的遊戯」として「芥川の非常に悪い面」が表出した作品とされた。また、平岡氏は本作品を善悪の「相克」を「強く出そうというモチーフで書いた作品ではない」と分析した。また、石割透『新鋭研究叢書4 芥川龍之介』初期作品の展開(『有精堂』一九八五年二月)では「作者の(日本と西洋)の深い認識が横たわっているわけでもない」とされた。
- (3) 高橋博史「芥川龍之介「煙草と悪魔」——初期芥川龍之介論のためのノート(1)——」(『学習院女子短期大学紀要』学習院女子短期大学、一九八六年一二月)。
- (4) 笹淵友二「明治大正文学の分析」(明治書院、一九七〇年一二月)。
- (5) 「聖フランセスコザベリヨ書翰記 下巻」の「第八十三號」には「八月十五日に(中略)鹿兒島に着したり」とある。河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡3』(平凡社、一九九四年九月)の「書簡九〇」にある日本上陸の日付「一五四九年八月、聖母の祝日(十五日)」と同じものである。
- (6) 一九一四年八月三〇日、井川恭苑書翰。
- (7) 鈴木達也「喫煙伝来史の研究」(思文閣、一九九九年一月)では、煙草にまつわる「我が国の文献・資料のうち代表的なもの」として、多数の文献における煙草伝来期の記述をまとめるが、天文年間に該当する期間はそこに示されていない。
- (8) 『日本庶民生活史料集成 第二十九巻 和漢三才図会(二)』(谷川健一編、三二書房、一九八〇年八月)。
- (9) 『司祭の木犀草』においては、木犀草が茂った原因の推測と、司祭の煩惱の比喩の二ヶ所にのみ悪魔の文字が見られ

る。確認は鈴木信太郎訳「司祭の木犀草」(『アナトール・フランス小説集6 新装復刊 バルタザール』白水社、二〇〇〇年九月)に拠った。

(10) 小谷瑛輔「芥川龍之介「煙草」と切支丹物の出発——ラフカディオ・ハーン以降の日本のポードレール受容を視座として」(『ヘルン研究』二 富山大学ヘルン(小泉八雲)研究会、二〇一七年三月)。

(11) 本稿では「悪魔」と翻訳された訳本に重きを置き、なおかつ「煙草と悪魔」執筆時には入手可能であった『トルストイ民話集』(塚本弘訳、洛陽堂、一九一六年五月)収録の「馬鹿」のイワンを参照した。ここで、三匹の小悪魔は「小悪魔」、大悪魔は「悪魔の親分」「悪魔の親方」「老悪魔」と訳される。

(12) 変身能力も共通するが、これは本作品中で「自分」により「ファウスト」の悪魔の特徴として扱われるため、本稿ではそれに倣い、メフィストフェレスの特徴とする。

(13) 邦訳が発表されるにつれ「ファウスト」の文体は多様化した。森鷗外訳におけるメフィストフェレスは、ファウストの前では敬語+私、独白部では横柄な口調+己を用い、口調における二面性が徹底された。「煙草と悪魔」の悪魔には特に鷗外訳のメフィストフェレス像が投影されている。

(14) ゲーテ「ファウスト」「審」の章。

(15) ゲーテ「ファウスト」「書齋」の章。

(16) 芥川の第一高等学校在学と新渡戸稲造の校長在任の期間から、芥川は鷗外訳「ファウスト」よりも前に新渡戸稲造『ファウスト物語』(六盟館、一九一〇年三月)に目を通していた可能性がある。

(17) 「芭蕉雑記」(一九三三年一月)。

(18) 「闇中間答」(前掲)。

(19) ノート「山梨夏季大学講義(仮)」。この「Satan」は「異常なる力」とされる。

(20) 「文芸雑話 饒舌」(一九一八年一月)。

(21) 「るしへる」(一九一八年一月)。一九一五年五月二三日の井川恭宛書簡に「ルイズの The Monk」で「ルシフアア」の物語を確認したとある。

(22) 他にも「LOS CAPRICHOS」には冒頭にメフィストフェレスを含む引用文があり、全集後記では「塵勞」の形犬をメフィストフェレスと関連づけるが、本文中にそれと明白な存在は登場しない。

(23) 「芸術その他」では来日したメフィストフェレスが批評家への皮肉を語る。「保吉の手帳から」の保吉は、教師として生徒に応用化学を教える悪魔に話しかけられることにより「一切の理論は灰色だが、緑なのは黄金なす生活の樹だ!」という「ファウスト」中の言葉を感じる。「侏儒の言葉」では「博士に化けた Mephistopheles」が大学の学生

に半肯定論法を説く。「三つのなぜ」では、「ファウストの悲劇」が始まるきっかけとして悪魔の言葉が作用したという創作が展開する。「闇中間答」では「僕」と問答を交わす「或声」を「昔あのファウストの部屋へ犬になつてはひつて行つた悪魔」とする。未定稿「メフィストフェレス(仮)」はメフィストフェレスらしき存在の一人語りである。多弁な悪魔像は「るしへる」にも顕著だが、悪魔ルシファアが活動する作品は、メフィストフェレスの登場作品と比べて圧倒的に少ない。

(24) 郡司英子「煙草と悪魔」試論(「論究」二松学舎大学佐古研究室、一九八三年三月)。

(25) 広瀬朝光「芥川の切支丹物新考察―「煙草」と「るしへる」の典拠―」(「文芸研究」日本文芸研究会、一九七五年五月)。本作品の典拠について、芥川は初出後記「校正の后に」で「昔、高木さんの比較神話学を読んだ時に見た話を少し変へて使つた」と述べている。

(26) 曹紗玉「悪と悪魔―大正五年から七年に書かれた四篇の切支丹物における芥川龍之介とキリスト教―」(「二松」二松学舎大学大学院文学研究科、一九九三年三月)。

(27) 未定稿「銀座の或珈琲店(仮)」(推定執筆年は一九二〇年頃)には、二十四年前にメフィストフェレスと契約したという男が登場する。これは「ファウスト考」で紹介される初期の戯曲のあらずしと一致する設定であり、芥川が

「ファウスト考」に感化され着想を得た可能性は極めて高い。

(28) 『東京朝日新聞(朝刊)』(一九一〇年三月二二日、一頁)。

(29) 『東京朝日新聞(朝刊)』(一九〇六年二月一九日、五頁)の煙草の健康被害の記事では、煙草が有害であると知りながらも禁煙できない当時の人々の様子がわかるが、一八九九年一月三〇日の同新聞朝刊六頁には煙草の薬効を主張する記事が見られる。芥川も当初は煙草の薬効を信じていたらしい(一九一一年一月一七日中塚癸巳男宛書簡)が、『軍艦金剛航海記』(一九一七年七月)ではニコチンによる体調不良の描写があり、煙草有害説を肯定している。

付記

本稿における「煙草と悪魔」本文及び芥川龍之介の他作品・未定稿・草稿・書簡・手帳類の確認と引用は全て『芥川龍之介全集』(岩波書店、一九九五―一九九八年、全二十四巻)に拠った。また、邦訳のゲーテ「ファウスト」の確認・引用は森鷗外訳のギョオテ「ファウスト 第一部」(富山房、一九一三年一月)、『ファウスト 第二部』(富山房、一九一三年三月)に拠った。なお、文献情報においては、森林太郎はすべて森鷗外とした。資料・文献の引用に際して、旧字は新字に改めた。

(たかやま・さよ) 二〇一八年度本学卒業生